

『わたしの羊と呼ばれる』 ヨハネ10:22-30

10:22 そのころ、エルサレムで宮きよめの祭が行われた。時は冬であった。

10:23 イエスは、宮の中にあるソロモンの廊を歩いておられた。

10:24 するとユダヤ人たちが、イエスを取り囲んで言った、「いつまでわたしたちを不安のままにしておくのか。あなたがキリストであるなら、そうとはっきり言っていただきたい」。

10:25 イエスは彼らに答えられた、「わたしは話したのだが、あなたがたは信じようとしない。わたしの父の名によってしているすべてのわざが、わたしのことをあかししている。

10:26 あなたがたが信じないのは、わたしの羊でないからである。

10:27 わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。

10:28 わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。

10:29 わたしの父がわたしに下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ手から、それを奪い取ることはできない。

10:30 わたしと父とは一つである」。

●序論

「宮きよめの祭り」は、新共同訳では「神殿封建記念祭」とあります。

これは、過去の屈辱とそこからの勝利を思い起こす日とされ、12月25日に祝われます。かつての屈辱、それはローマ帝国以前、この地域一帯を支配したセレウコス朝シリアの王、アンティオコス・エピファネスが、ユダヤ人たちにとって最悪の王で、ユダヤ人の神殿に偶像礼拝の祭壇を立ててひどく汚したことがありました。

それに反発してユダヤ人のマカベアが蜂起して戦いを挑み、数年の後勝利して神殿からすべての偶像や異教的なものを取り払ったのです。時はイエスさまの公生涯から約200年程前の紀元前164年12月25年のことだと言われています。

そしてその時を思い起こし、記念する。今日の物語の背景にあったのです。

10:22 そのころ、エルサレムで宮きよめの祭が行われた。時は冬であった。

10:23 イエスは、宮の中にあるソロモンの廊を歩いておられた。

10:24 するとユダヤ人たちが、イエスを取り囲んで言った、「いつまでわたしたちを不安のままにしておくのか。あなたがキリストであるなら、そうとはっきり言っていただきたい」。

詰りめる人々の背景に、今はあの屈辱からの勝利の時を経て、未だ自分たちの国がローマ帝国に支配されて虐げられている…、そこから解放する存在こそ、救い主メシアだという思いが前のめりにイエスさまに向けられていたのです。

そして、ヨハネの福音書が記された時代は、起源80年～95年頃だと言われます。その時には、ユダヤ人たちは既に離散していました。彼らは起源70年にローマ帝国によってエルサレムの都を破壊尽くされた後だったのです。それは悲惨な出来事でした。

そんな苦痛の経験を経たユダヤ人たちは、それでも自分たち回復するメシア待望を抱えながらも、キリストを信じるクリスチャンたちに敵意を向け続けていたです。わたしたちはそんなメシアを信じない。求めているんじゃないんだと…。

## ●本論

### I. 羊となろうとしない人々のこと

10:24 するとユダヤ人たちが、イエスを取り囲んで言った、「いつまでわたしたちを不安のままにしておくのか。あなたがキリストであるなら、そうとはっきり言っていただきたい」。

「不安なままにしておくのか」を他の翻訳では「気をもませるのか」とあります。もっと言うと、キリストっぽい言動をしてわたしたちの期待する心をくすぐるのをやめて、そうならそうとはっきり言ってくれ…といういらだちを、ここでぶつけています。それに対するイエスさまの答えはこうです。

10:25 イエスは彼らに答えられた、「わたしは話したのだが、あなたがたは信じようとしない。わたしの父の名によってしているすべてのわざが、わたしのことをあかししている。

10:26 あなたがたが信じないのは、わたしの羊でないからである。

このヨハネの福音書の初めから見られる特徴は、イエスさまを巡って、信じるか信じないかが、はっきり分かれるという出来事を繰り返し語っているということです。

少し前の記事では、イエスさまの語られたことで、またなされた盲人の癒しでユダヤ人たちの間で紛争が起こったともありました。

なぜそれほどまでの奇跡の数々を目撃してなお、彼らはイエスさまが神からの救い主と受け入れることをしなかったのか、…それは、自分たちの求めるメシア像、救い主のありさまではなかったからです。

病の人が癒されること、盲人が見えるようになること、足の不自由な人が立つことができたこと、どれもすばらしい神由来のみわざです。貧しい人罪ある人が癒しと慰め赦しを受け取って変えられること…も遠目に見ながら知っていました。

でも、ユダヤ人たちにとって、そんなことは、自分たちの求めることではなかった。関心のあることでもなく、重要でもなかったということです。だから言うのです。

「いつまでわたしたちを不安のままにしておくのか（気をもませるのか）」と。

あの200年程前に、マカベアが神殿を勝ち取ったような勝利をもう一度…という思いが彼らのメシア待望でした。

しかし、救い主イエスさまの意図するところは違いました。

ヨハネ10:10 わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。

あの教師ニコデモとの対話で、スカルの井戸のサマリヤの女性との対話で、そしてベテスダの池での病の人の癒しで、そして生まれつきの盲人のひとの癒しと救いでイエスさまが語られなされたことは、一人ひとりの魂の救いと癒しだったのです。

わたしたちの心が探られます。わたしたちを不安にさせているものは、自分に対してに思わさぶりなイエスさまでしょうか？

もしかしたら、自分の願望の通りにならない状況や、誰か、そしてイエスさまにいら立っているのかもしれない。

イエスさまは、わたしたちの人生の最善の回復と豊かないのちを見ていてくださるというイエスさま視点にゆだねることができれば感謝です。

## Ⅱ. 羊とされた人々のこと

10:27 わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。

イエスさまは、ただついていく私たちを「わたしの羊」と呼んでくださいます。

わたしたち一人一人は、イエスさまに知っていただいているのです。

10:14 わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。

そうしてイエスさまの祝福にあずかるのです。

10:28 わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。

イエスさまがくださる永遠のいのちは、死で終わることのない来たるべき日にいただく復活の命であると同時に、今神さまからいただく永遠の祝福された関係の中に置かれる。つまり神の子とされるということです。

わたしをと呼んでくださる方が神さまで、わたしは神さまのことをお父さんと呼ぶことができるのです。

ヨハネは既にそのことを語ってくれました。

1:12-13 しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。

その上でここで言われます。

:28 …だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。

「だから」というのは、イエスさまが、くださったからだ…ということです。

わたしたちの信仰の始まりも、わたしたちは始まりではなく、神さまは始まりでした。

「それらの人は血筋によらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。」

そしてこうも言われています。

ヨハネ15:16 あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。

だから、わたしたちはイエスさまを信じイエスさまについていく人に向けて、あなたは大丈夫…、わたしたちは大丈夫と、いつでも言うことができます。

わたしたちを愛して命をも捨てられたお方こそがイエスさまだからです。

10:11 わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。

わたしたちは羊なんですから、イエスさまについて行けばいい。それがわたしたちへの最高のおすすめなのです。

### Ⅲ. 父と一つである方のこと

10:29 わたしの父がわたしに下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ手から、それを奪い取ることはできない。

その羊たちと表現されるイエスさまについていく私たちのことをかけがえのない存在として見てくださり、神さまの者としてくださり、そこから奪い取ることはできないと言われるのです。そしてその上で、わたし（イエスさまはご自身）と父なる神さまとは一つであると言われるのです。

10:30 わたしと父とは一つである」。

このあと、このイエスさまの一言を巡ってひと悶着あります。

ここで知っておいていただきたいのは、わたしたちを大切にしてくださるのは、イエスさまの思いであり、父なる神さまの思いであるということです。

### ●さいごに

この10章に始まり、今日のお読みしたところで、わたしが心惹かれるのは、人々にたいして、くりかえし「わたし」という言葉を主張されることです。

イエスさまが「わたし」とかたるとき、そこに見えるのは「わたしの羊」と呼ぶ人たちの姿でした。弱く迷いやすい人々、傷つき、貧しく病を負った人々の姿がそこに連想されるような人々でした。

それは律法主義からは遠く離れた人々かもしれない。そして民の指導者や律法学者たちからは最も無視され、遠ざけられた来た人々であるかもしれません。

簡単に言うと、彼らに最も関心を払われなかった人々です。

けれどもその人たちをイエスさまは、御自分のところに招き入れ、イエス様もとにいて人を「わたしの羊」と呼び、またわたしは彼らに永遠の命を与える。と言われるのです。

このイエスさまのみ声を聴いて、「いいんですか、わたしもついて行って」と言えることは幸いなのです。その人をイエスさまは迎えて下さり「わたしの羊」と呼んでくださるとここで証しされているからです。

そうして私たちはこの御言葉の祝福は、わたしのことだとわかるのです。

10:27 わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。

10:28 わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。

今日、あらためてこのイエスさまはじまりの確かな救いの祝福を心から感謝し、イエスさまについて行きましょう。